

2023年  
令和5年

# 入学試験



試験開始を待つ受験生と担当教員(2月1日)

## 新型コロナウイルス4年目 万全の感染予防対策

東京短期大学(小林隆太郎学長)の「日本口腔保健学雑誌」が、去年12月に刊行した12巻第1号をもって、創刊10周年を迎えた。同誌は、平成24年(二〇一二)3月に「日本歯科大学東京短期大学雑誌」として創刊された。歯科衛生士・歯科技工士の学校における、わが国初の学術誌(紀要)であった。令和元年12月に「日本口腔保健学雑誌」と改名し、全国を対象とした斯界唯一の学術誌となる。

## 東京短大 学術誌10年迎う



東京千代田区富士見  
日本歯科大学新聞会  
発行兼 中原 泉  
編集人 年 6 回  
発行 1部100円  
定価 編集室 (〒951-8580)  
新潟市中央区浜浦町1-8  
☎ 025 (267) 1500



本学のシンボルマーク

令和5年(二〇二三)の日本歯科大学入学試験(前期)は、1月中旬の大学共通テストと2月初旬の本学試験を、東京富士見において施行した。今年4年目となる新型コロナウイルス下、万全の感染予防対策を行った。

今年度の入学試験は、例年通り大学共通テスト利用入学試験と、本学で実施する一般選抜試験の二本立てで実施した。それは、同一試験日に東京と新潟の両学部の受験と併願が可能な、全学部入学試験である。

例年通り2月1日、生命歯学部において学力試験と面接試験を実施し、4日に合格者を掲示およびホームページで発表した。大学共通テスト利用の入試は8日、本学指定の科目の受験者の面接試験を実施し、11日に合格者を発表した。

短期大学の入試  
東京短期大学の一般選抜A入学試験は、2月6日に実施し、8日に歯科技工学科と歯科衛生学科の合格者を発表した。

新潟短期大学の一般選抜入学試験は、2月13日に実施し、15日に歯科衛生学科の合格者を発表した。

なお、いずれの入試においても、新型コロナウイルス対策として、受験会場玄関にて体温測定



本館玄関で、消毒、検温を通る受験生

## 言の葉

財産家にはなれなかったが、人間財産家ではあった。わが人生に悔いはない。  
齋藤貞雄・二〇二二  
先生は、34回卒・千葉県、去年十一月十六日に100歳で死去された。

し、手指の消毒を励行させた。試験会場ではマスクの着用を指示し、受験者席の間隔と室内換気を徹底した。  
本紙発刊75年  
昭和23年創刊  
本紙、日本歯科大学新聞は、本年度で刊行75年になる。昭和23年(一九四八)4月に朝比奈敏行(37回)が編集・発行人として第一号を発刊した。大学新聞としては草分けとなる。当初は学生主体の編集であったが、47年(一九七二)より大学報となり、中原泉(54回)を編集・発行人として本年度で創刊75年、本号で六八一号となる。本紙縮刷版は、昭和47年分より発刊し、昨年で60冊を数える。

## 村上一枝先生 京都環境殿堂入り



本学名誉博士の村上一枝先生(54回卒)は、昨年、京都府の主催する「KYOTO地球環境の殿堂」に殿堂入りが決まった。この殿堂は、地球環境の保全に貢献した人を顕彰する国際的な賞で、申請や応募ではなく指名される。村上先生は、西アフリカのマリ共和国におけるボランティア活動が33年におよび、同国の農村地域の支援と自立に貢献したことが評価され、内外2名とともに第13回殿堂入り者となった。

同表彰式は、去年11月14日に京都市の国立京都国際会館アネックスホールにおいて開催された。13時からの表彰式において、村上先生は表彰を受け、殿堂入りの挨拶をした。式には、中原理事長が出席した。式は、午後5時より、殿堂入り者記念講演に移り、村上先生は西アフリカ農村自立協力会代表として、マリと西アフリカ農村の地域環境と人々の暮らしを支える活動について語った。

さらにパネルディスカッション、府内高校生とのトークセッションのパネリストとして参加し、17時に閉会した。(写真：中原理事長と並ぶ村上一枝先生)

## 日本歯科大学 OPEN CAMPUS 2023

—受験生はもちろん、どなたでも参加できます—

- ◇生命歯学部(東京)オープンキャンパス  
(新型コロナウイルス感染症の感染状況により、変更が生じる場合があります。本学HPでご確認ください)  
5/27(土)、6/4(日・校友対象)、7/27(木)、8/2(水・多摩クリニック)、8/19(土)、10/28(土・富士見祭)、10/29(日・富士見祭)
- ◇新潟生命歯学部オープンキャンパス  
(新型コロナウイルス感染症の感染状況により、変更が生じる場合があります。本学HPでご確認ください)  
6/11(日・浜浦祭)、7/2(日・ハジゴトフェス)、7/22(土)、8/6(日)、8/26(土)、9/23(土)、11/4(土)、12/9(土)
- ◇東京短期大学オープンキャンパス  
(新型コロナウイルス感染症の感染状況により、変更が生じる場合があります。本学HPでご確認ください)  
5/21(日)、6/11(日)、6/24(土)、7/15(土)、7/30(日)、8/2(水)、8/25(金)、12/25(月)
- ◇新潟短期大学オープンキャンパス  
(新型コロナウイルス感染症の感染状況により、変更が生じる場合があります。本学HPでご確認ください)  
5/27(土)、6/11(日・浜浦祭)、7/2(日・ハジゴトフェス)、7/17(月・祝)、7/28(金)、8/10(水)、8/27(日)、9/30(日)、10/15(日)、11/25(土)、3/17(日)



# 立春 富士見本館の屋上より 武道館方向の夜景を遠望する 如月

## 歯鏡

▼飯塚哲夫先生(50回卒業) 上尾市・名誉博士)は、1月15日飯田橋のホテルエドモントにおいて講演されました。近代口腔科学研究会主催による五〇〇回例会記念の新年講演会でした。

先生は、「顎関節症」をテーマに、四二〇名の参加者に、13時から3時間間にわたり、世界中の新知見を交えて顎関節症を語り尽くされました。

先生は「歯科医療とはなにか」に始まり、歯周療法、歯内療法、矯正歯科の基礎と臨床と、そのライフワークは広範かつ多角的にわたっています。その研鑽は5版、6版と重ねておられます。

著書は40余冊を数え、八十五歳の先生の飽くなき不屈のご活動には、脱帽のほかありません。

▼長谷川嘉一先生(67回卒業) 群馬県)は、去年11月に『衆議院議員 長谷川嘉一戦いの軌跡 国会質問集』(長谷川嘉一氏を支援する国民連帯の会発行)を出版されました。

先生は、平成3年の太田市議、7年の群馬県議を経て、29年に3度目の挑戦で衆議院議員に当選されました。念願の国政において、「いのち」「暮らし」「未来」を守る政策を実現すべく活動されました。

4年間の在任中、本会議1回、厚生労働委員会11回、農林水産委員会10

回、財務金融委員会3回、地方創生委員会7回の質問に立ちました。その全質問をまとめたのが、同質問集です。二二五ページにおよぶ質問集には、先生の政治信条と議会活動の熱情があらわれています。

実際に長谷川先生は、物静かで柔らかい物腰の方で、熱誠を秘めた活動をつづける政治家です。

現在、先生は捲土重来を期して、粉骨砕身、至誠の政治活動をしておられます。

▼上越新幹線は、開通40周年を迎えました。本学新潟学部が開校する前年の昭和46年に、工事がはじまりました。初めての卒業生がでる頃には開通すると期待していました。

が、遅れに遅れて57年に大宮駅が開業しました。大宮からは代替電車だったので、乗客は席取りを争ってホームを走りました。つぎは昭和60年に上野駅に延伸し、在来線に乗りかえました。

ようやく平成3年に、念願の東京駅に乗り入れました。新潟歯学部開校から、20年目でした。新幹線が初めて東京駅ホームに吸い込まれていく光景は今も忘れません。

それまでの上越線は、東京ー新潟間4時間10分で、古い車体は揺れに揺れました。新潟の教授方は、幾度か大雪で止められ、手慣れた握り飯の配給をうけました。

ピース1本立てでも倒れないのが自慢でした。スプリンクラーによる融雪設備など、雪害対策に万全が施され、大雪でも止まることはありません。

本学が第2歯学部を新潟市に決めた理由の一つは、近い将来新幹線が通るということでした。

洋側と日本海側を結ぶ初の新幹線でした。上越新幹線の名称は、上越市と紛らわしいのですが、群馬県の旧国名の上野と、新潟県の旧国名の越後から、角榮さんの肝煎りで命名されたといえます。

▼野上ゆかり先生(69回卒業・東京都)は、去年11月に『羽坂勇司回顧録』(羽坂美登利発行)を出版されました。

言うまでもなく羽坂勇司先生は、41回卒業で藤沢市に開業され、平成2年より16年間にわたって学校法人青山学院理事長をつとめられ、令和2年1月12日に99歳で亡くなりました。

野上先生は、羽坂先生の長女です。二〇〇ページにおよぶ回顧録は、先生を偲ぶ方々の追憶文、先生ご自身による回顧録、先生の学術・資料、年譜、家系図、美登利夫人はじめ御子様方の言葉等が満載されています。

とりわけ、全編に綴られた羽坂回顧録は、わがルーツにはじまり、青山学院の4年制高等商業学部により召集され、アンダマン島、スマトラ島を転

戦する。シンガポールで捕虜となり、戦禍を奇跡的に生き抜く。

復員後、歯科医師の父君を継いで日本歯科医学専門学校に入学し、昭和27年に卒業する。昭和50年に横浜市に羽坂デンタルクリニックを開院し、あわせて青山学院の理事に就任し、二足の草鞋を

はく。前任者の急逝により、突然理事長代行となり、平成2年に理事長に就任した。

すぐさま将来構想委員会を設立し、さまざまな組織改革を断行する。厚木から相模原キャンパスに統合整備し、文理融合型の教育を実現する。好立地の青山キャンパスの再開発をすすめる、数々の学院発展に尽力し、青学のブランドを高める。

平成17年の理事長退任後、旺盛な探究心により歯科医学史の研究に専心

する。平成14年に、日本歯科大学より名誉博士号をうける。

このように回顧録には99歳で逝去されるまでの足跡が記されています。先生の少々甲高い切々とした語り口、誠実で謙虚な人柄、飾らない温格は、青学のトップの品格を漂わせ、ユーモアをたやすく、強い信念と実行力を存分に発揮されました。

本学卒業生として、は、まことに稀有な異色の雄飛をされた巨人であります。

先生は、いつもあなたにかいご家族に囲まれて、長い生涯を過ごされました。そのご家族方の愛情と敬慕は、この回顧録に美しい結晶となって輝いています。

先生の口ずさんだ歌「おおいなるものものからに ひかれゆく わがあしあとの おぼつかなしや」 (S・N)

### 本紙縮刷版60冊目

#### 会告

このたび新刊会では、「日本歯科大学新聞」の令和4年(二〇二二)版を編集発行しました。

これは本紙のユニークな企画として、昭和38年より刊行しており、今号で60冊目になります。本紙を週刊誌大に縮小し、第六七三号から六八〇号までを収録していますので、先着順にさせていただきます。

令和4年の日本歯科大学の活動を報道した